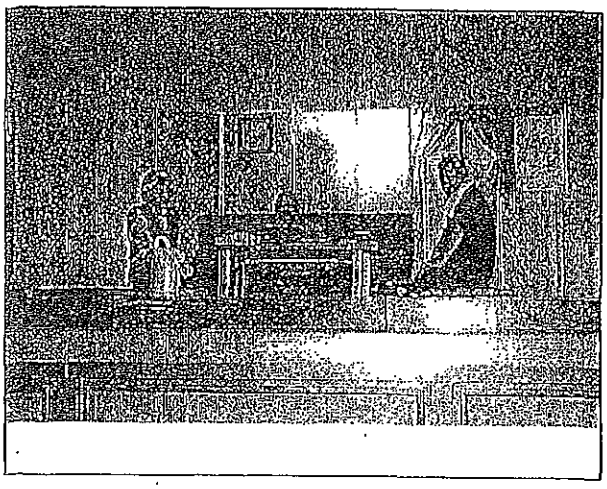

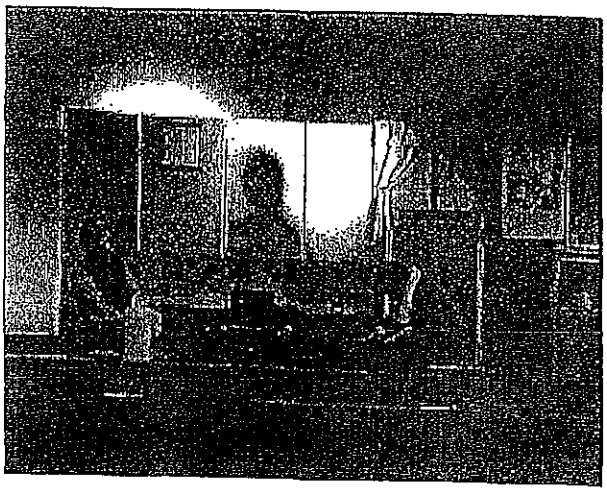

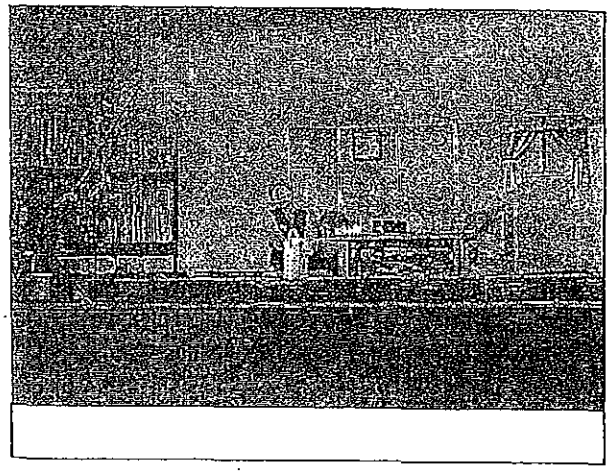

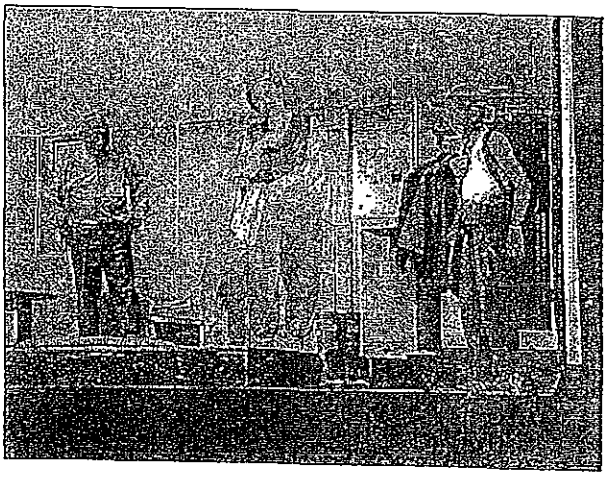

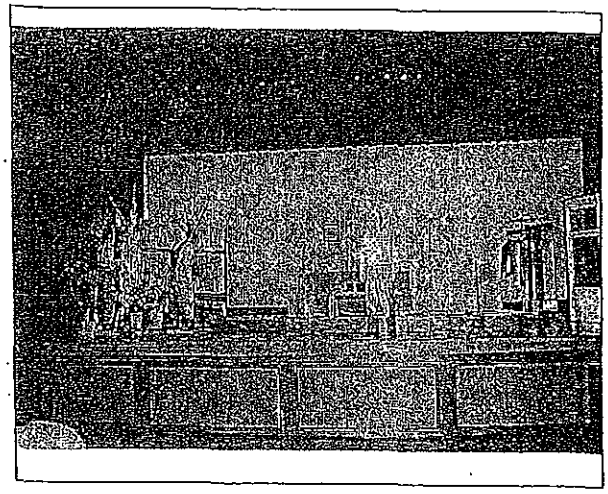

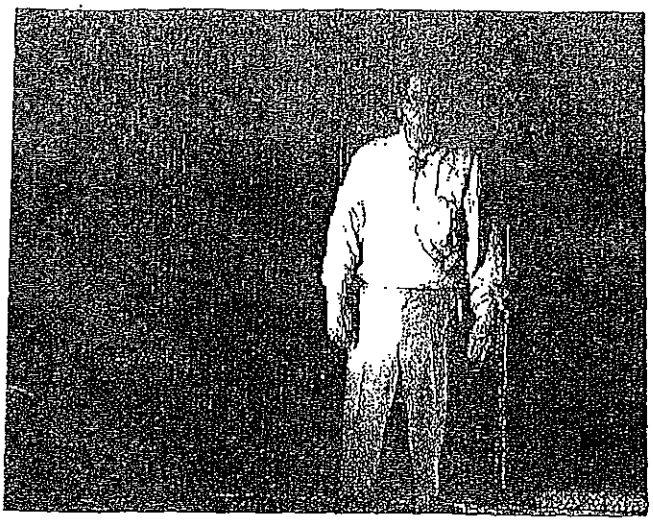

「ウメさんは初めは緊張していたけど、なじみの関係ができてくると、次第に昔のことを思い出し、話してくれるようになりました。ウメさんにとって、畑の仕事をしながら子供を一生懸命育てていた頃が、大変だったけど人生の中で一番充実した時期なんだなと思いました。家をしっかり守ってきたウメさん、ご主人のお世話をいろいろしてあげたいという優しい気持ちが伝わってきました。」

♪実際にやすらぎ支援員をしている大和田さんは語ります

「初めは、訪問してどのように関わったらよいのか戸惑いましたが、回を重ねるごとに支援員を待っていてくれるようになりました。そうなればしめたものです。自分が何かをすると言うよりも、相手の話を上手に聞くことが大切だと思います。」

「ものわすれ散歩のできるまち　ほんべつ」のまちづくり

私たちのまちづくりは、特別なことではありません。「地域の人々が認知症を理解」し、「その人のできなくなったことを見つけるのではなく、できることを見つけ」て、「これまでどおり、なじみの地域で、なじみの人たちと暮らせる」。そんなまちを目指しています。

♪今回の「総合的な学習の時間」で、ある中学生は、認知症の方とお話しをし、何度も同じ話を聞き、その方が「自分が家にいると家族に迷惑をかける」とさびしそうに話してくれたという体験を通し、「お年寄りが同じことを言っても、イライラしたり怒ったりせず、やさしく話すことが大切だと」感じてくれました。このような、ひとりの「理解」が「人々の理解」につながっていくのだと思います。これからも、多くの人々と手をつなぎ、「もの忘れ散歩のできるまち」づくりを進めたいと思います。